

# 統語論的観点からみた「ニ格」

朴江訓\*

(e-mail : hun0531@naver.com)

## <目次>

- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| 1. はじめに              | 3. 考察                |
| 2. 先行研究の概観と問題のありか    | 3.1. 「多重NPI」テスト      |
| 2.1. 「格助詞」vs. 「後置詞」  | 3.2. 補助的テスト：「統語処理原理」 |
| 2.2. 「ニ格」の先行研究と問題の所在 | 4. おわりに              |

キーワード：格助詞(Case particle)、後置詞(Postposition)、統語的テスト(Syntactic test)、格付与(Case assignment)、多重NPI(Multiple NPIs)

## 1. はじめに

本稿の目的は先行研究において未解決のまま残されてきた「ニ格」の性質を統語論的観点から明らかにすることである。日本語の「ニ格」は格助詞の中でも多重用法を持っているものとして知られている。この用法の分類法においては先行研究によってそれぞれ異なっているが、代表的な用法を中心に菅井(2007)を引用しまとめると以下のようなものである(以下、「ニ」には便宜上下線を引くことにする)。

- (1) a. 針金を 内側に 曲げる。[方向]
- b. 壁に ボールを投げる。[到達点]
- c. 手に インクが付いてしまった。[密着点]
- d. スプーンに 調味料を入れる。[収斂先]

(菅井(2007:13))

\* 全州大学校、助教授、日本語学・対照言語学

菅井(2007)によると、(1a)における下線部「ニ」は方向、(1b)においては到達点、(1c)は密着点、それから(1d)は収斂先の意味役割を持つと指摘される。意味役割(semantic role)とは、述語(動詞・形容詞)が表す動作・事件・状態などに関与する項(argument)が果たす意味上の機能のことを指し、主題役割(thematic role)、 $\Theta$ 役割(semantic role)とも呼ばれる(安藤・小野(2000:279))。

さらに、「ニ格」は下記のようなさまざまな意味役割を持っているとされる。

- (2) a. 花子を 食事に 誘った。[目的]
- b. 子どもに 行儀作法を教える。[伝達先]
- c. 音楽の才能に 満ちている。[要素]
- d. 幼虫が さなぎに なった。[結果]
- e. この問題は 太郎にも 解ける。[経験者]

(菅井(2007:14))

- (3) a. 友達に 参考書を借りる。[起点]
- b. 両親に 結婚を 反対された。[動作者]
- c. 余りの熱さに 気を失った。[原因]
- d. 早朝 5時に 集合した。[時間]

(2a)における下線部「ニ」は目的、(2b)においては伝達先、(2c)は要素、それから(2d)は経験者の意味役割を持つとされる。また、(3a)の下線部「ニ」は起点、(3b)においては動作者、(3c)は原因、そして(3d)は時間の意味役割を持つと受け入れられている。

従来「ニ格」の研究は上述したようにその用法が多いこともあり、多くの研究者によって統語論・意味論・語用論などさまざまなアプローチから捉えられてきた。特に、統語論研究においては「ニ格」が文法格であるか、副詞格<sup>1)</sup>であるのかに対する議論は非常に重要な問題であり今でも続いている。しかしながら、先行研究において「ニ格」が文法格か、それとも副詞格であるのかが判断できる決定的な統語的テストが出ておらず、未だに未解決のまま残されてきたと考えられる。よって、本稿では「ニ格」の統語的性質を明らかにする統語的テストがあることを提示すると共に、「ニ格」の統語的性質をその統語的テストを用い明らかにする。

1) 文法格と副詞格に関する説明は後の2.1節で行われる。

## 2. 先行研究の概観と問題のありか

本節では、先行研究における格助詞と後置詞、それから「二格」に関する先行研究と問題の所在について述べる。

### 2.1. 「格助詞」vs. 「後置詞」

日本語の格と格助詞に関する本格的な研究は、1980年代に入って以来であると考えられる。そもそも格の研究はインド・ヨーロッパ諸語を対象とした理論言語学、特に生成文法の枠組みにより整えられてきたといえる。日本語における格の研究もこのような理論言語学の影響を受け、これまで気づけなかった興味深い言語現象がかなり明らかになってきたと考えられる。しかしながら、インド・ヨーロッパ諸語をはじめ、日本語など自然言語における格の研究はそれほど簡単ではない。この理由はいろいろと挙げられるが、まず1つのフレームに多数の意味・機能が混在しているからであることが挙げられる。以下では、「二格」に関する先行研究に入る前に「格助詞」と「後置詞」について先に概観する。

#### 2.1.1. 格(Case)と格助詞(case-marker)

格とは、名詞・代名詞が文中で他の語とどのような関係にあるかということ、すなわち統語関係を示す文法範疇である(現代言語学辞典(1988))。格は各言語の類型によって、語順や名詞の活用などで示される。日本語の場合、名詞に後接する「が・を・に・へ・から・と・で・より・まで」のように一定の独立した形式で現れる。これらの形式のことを「格助詞」と言う。従来以上でみた統語関係を示す格のことを「形式格」または「表層格」と呼んできた。これとは別に、もう一つの格、つまり名詞が文中で他の語と持つ意味的な関係を示す格が存在する。Fillmore(1968)はこのような格のことを「意味格」または「深層格」と呼び、動作主(Agent)、原因(Causer)、受動者(Patient)、対象(Theme)、経験者(Experiencer)、着点(Goal)、起点(Source)、場所(Location)、受益者(Benefactive)、道具(Instrument)のような意味的な格範疇<sup>2)</sup>に分けている。

#### 2.1.2. 後置詞(postposition)

後置詞(postposition)とは、英語やヨーロッパ語の文法の前置詞(preposition)に対応す

2) このようなFillmore(1968)の概念は1節で述べた意味役割に相応する。

るものである(鈴木(1972))。また、Hagège(2010)はこのような後置詞と前置詞のことを接置詞(adposition)と呼ぶ。接置詞とは名詞のような補語(complement)と述語との関係を示す文法的道具であると定義する。また、Hagègeは接置詞の統語的位置は英語やヨーロッパ語などのように補語の前に来る場合(→前置詞)と日本語や韓国語のように補語の後ろに来る場合(→後置詞)とで分けられると述べている。例えば、日本語の「太郎は学校に滞在していた」という文を英語に直すと「Taro was staying at school」のようになる。日本語の場合「名詞(学校)+後置詞(に)」であり、英語の場合「前置詞(at)+名詞(school)」である。

### 2.1.3. 格助詞と後置詞との違い

副島(2003)は格助詞と後置詞は機能上において決定的に異なっていると指摘する。つまり、副島(2003:55)は「格助詞が文上の名詞に後接することによって、主語だの補語だのといった文の主成分として述語にかかっていくという、文論上の文法的関係を演じられるのに対して、後置詞はあくまで文の主成分を補助する形で存在する二次的成分として、意味論上の意味的役割を演じるにすぎないということ」と述べている。実際に、城田(1993)は「が」「を」などを文法的関係を表すことから「文法格」と言い、これらの助詞を「格助詞」と呼ぶ。一方、「まで」「から」「で」などを副次的ではあるが、文法的関係を表すことから「副詞格」と呼び、これらの助詞を「副詞助詞」と言う。要するに、先行研究によって呼び方はそれぞれ異なるが、上記の城田(1993)と副島(2003)が指摘した概念はほぼ一致する。Sadakane & Koizumi(1995)とMiyagawa(1997)は城田(1993)が言う「格助詞」と「副詞助詞」のことをそれぞれ「Case-Marker」と「Postposition」と呼んでいる。以下では、城田(1993)に従い「文法格/格助詞」と「副詞格/副詞助詞」の用語を用いることにする。

## 2.2. 「ニ格」の先行研究と問題の所在

1節でも述べたように、従来「ニ格」の研究はその用法が多いこともあり多くの研究者によって統語論・意味論・語用論などさまざまなアプローチから捉えられてきた。本稿では統語論的観点から「ニ格」をみるので、統語論のアプローチをとった先行研究で頻繁に引用される代表的な先行研究、城田(1993)、Sadakane & Koizumi(1995)、Miyagawa(1997)を概観する。

まず、城田(1993)について概観する。城田はKuryłowicz(1949)の主張に基づき、日本

語の格助詞は一次機能と二次機能を持っていると指摘する。一次機能とは、特定の条件、ある程度はつきりと定められる(限定された)条件のもとで働く機能のことであり、二次機能とは、条件の限定の少ないもの、あるいはないものである。「ニ格」においても一次機能と二次機能に分け、一次機能は副詞格として、二次機能は文法格として働く主張する。また、城田は副詞格を持つ「ニ格」を大きく12個に、文法格の場合は2個に分けている。紙幅の都合上、文法格に当たる用法のみ提示することにする。下記の(4)と(5)をみてもらいたい。

(4) 述語転化補語(コピュラ「だ」からの転化)：「-になる、-に思う」などにおける「ニ格」を文法格として捉える。

(例) 花子は ピアニストに なった。 (城田(1993))

(5) 「ヲ格」と同じく直接目的語を示す場合：「-に反対する、-に賛成する、-にあこがれる」など

(例) 共産党が 政府案に 反対している。 (同)

他方、Sadakane & Koizumi(1995)は「ニ格」の用法を31個に分け、次のような2つの用法のみが文法格に当たると主張する。

(6) 二重目的語構文における間接目的語(goal indirect object)

(例) エミは ミカに バラの花束を 挙げた。

(Sadakane & Koizumi(1995))

(7) 自動詞「乗る/変わる」に前接する場合(change of position with an intransitive verb)

(例) カンタは 遊園地で 馬に 乗った。 (同)

興味深いことに、Miyagawa(1997)は上記のSadakane & Koizumi(1995)の主張に反論し、二重目的語構文において間接目的語と直接目的語の語順によってその性質が異なってくると主張する。

(8) a. メアリーが 友だちに 二人 CDを 送った。 (間接目的語-直接目的語)

b.???メアリーが CDを 友だちに 二人 送った。 (直接目的語-間接目的語)

(Miyagawa(1997))

Miyagawa(1997)はいわゆる「数量詞遊離現象」を挙げ、下線部の間接目的語が(8a)のように二重下線部の直接目的語の前にくると正文になるが、(8b)のように直接目的語の後にくると非文になると指摘する。このような現象に基づき、「ニ格」はその語順によって性質が異なると述べる。このことを図式で示すと次のようになる。

(9) a. [DP<sup>3</sup>] [NP …]-に] [DP [NP … ]-を]

-に：格助詞(文法格)

b. [DP [NP …]-を] [PP [DP … ]-に]

-に：副詞助詞(副詞格)

以上、先行研究において「ニ格」がある統語環境で文法格を持つのか、それとも副詞格を持つのかについて判断が別れていることをみた。1990年代以来、このような問題を抱えてきたが、未だにその答えは出ておらず今後の研究を待っている状況である。では、なぜ先行研究では「ニ格」の持つ格の判定において意見が別れているのであろうか。このことは今までこれといった統語的テストが見当たらなかったからであると考えられる。よって、本稿では「ニ格」のように多重用法を持っている格助詞の文法的性質を判定するにあたって有用なテストがあることを紹介し、これからの格の研究に貢献できればと考えられる。

ちなみに、ここで次のような更なる疑問点が挙げられる。第一の疑問点は、「なぜ「ニ格」であるのか」ということである。上述したように「ニ格」は日本語の格助詞の中でも、その用法がもっとも多いと指摘されている(国立国語研究所(1951)、城田(1993)、Sadakane & Koizumi(1995)、Miyagawa(1997)、石田(2003))。よって、従来「ニ格」の研究は多くの研究者によって関心が寄せられ、特に「ニ格」のどういものが文法格かまたは、副詞格かが問題になってきたわけである。第二の疑問点は、「文法格と副詞格を区別するのは、なぜ重要な問題であるのか」というのである。統語論において格助詞は格付与(case assignment)という格理論(case theory)において格の認可が与えられる。当然、文法格の格助詞と副詞格の副詞助詞は互いに異なる認可条件(licensing condition)を持っている。ある適格な構造(句や文)に現れるすべての要素はそれらの要素が適格であるための何らかの原理(principle)や条件(condition)をすべて満たしているため構造全体として判断される。このような場合、個々の要素は何らかの原理や条件で認可(license)されていると言う(安藤・小野(2000:148))。よって、当該の要素が格助詞であるのか、または副詞助詞であるのかは、統語論研究において非常に

3) DP: Determiner Phrase(限定詞句)、NP: Noun Phrase(名詞句)、PP: Postposition Phrase(後置詞句)

重要な問題である。

本稿では、以上のような問題点を踏まえ、日本語における「ニ格」の性質、特にどういう用法が文法格か、または副詞格かを明らかにする。

### 3. 考察

まず、本稿の主張を以下のように示しておく。

[本稿の主張]

- (10) a. 格助詞「ニ」のように多重機能を持っているものが文法格か、または副詞格かを判断するには、いわゆる「多重否定極性表現構文(Multiple Negative Polarity Item Constructions: 以下、多重NPI構文)」が有用なテストとして用いられる。
- b. テストの結果、「名詞+になる(結果)」における「ニ格」は文法格として用いられた典型的な用法である。
- c. 「統語処理原理(Syntactic Processing Principles)」もその補助的テストとして用いられる。

以下では、本稿の主張(10)が妥当であるかどうか検証を行う。

#### 3.1. 「多重NPI」テスト

本節では「多重NPI」テストが「ニ格」の文法格か、副詞格かが判断できる有用な統語的テストとして用いられることを示す。NPI(Negative Polarity Item)とは、統語的に必ず否定文にのみ現れる表現を指し、これらのNPIが同一節内において多重共起したのを「多重NPI構文」と呼ぶ。代表的な多重NPI構文を概観すると下記のようなものである。

- (11) a. 誰も 何も 食べなかった。
- b. 誰も 決して しゃべらなかった。

(Kato(1985:154))

(11a)は「不定語モ」の「誰も」と「何も」が共起した文、(11b)は「誰も」と否定副詞

の「決して」が共起した多重NPI構文である。ただし、先行研究において「しか」は下記の例のように多重NPI構文に用いられないと指摘される。

- (12) a. \*太郎しか 何も 食べなかった。 (Aoyagi & Ishii(1994:301))  
 b. 誰も 何も 食べなかった。 (= (11a))  
 (13) a. \*太郎しか 決して しゃべらなかった。 (Kato(1985:154))  
 b. 誰も 決して しゃべらなかった。 (= (11b))

(12)は同一の述語「食べなかった」が用いられている多重NPI構文であるが、(12a)は不適格文であるのに対し、(12b)は適格文である。(12a)と(12b)の相違点は主語位置に現れるNPIのタイプであり、(12a)には「しか」句が、(12b)には「誰も」句が現れている。このことは(13)の場合にも同様であり、(13a)には「しか」句が、(13b)には「誰も」句が現れているが、(13a)は不適格文であるのに対し、(13b)は適格文である。

朴(2007)は日本語のNPIにおいて上述したような非対称性が現れるのは、日本語の多重NPI構文の認可条件には下記のような統語的特徴が存在するからである指摘する。

(14) 多重NPI構文の認可条件

日本語における多重NPI構文は項・付加詞の非対称性(argument/adjunct asymmetry)が存在し、すべてのNPIは必ず付加詞の位置に現れなければならない。

(14)の認可条件を以下のような実例をもって確かめる。

- (15) a. \*太郎しか 何も 食べなかった。 (= (12a))  
 b. インターネット上の 仮想空間でしか 何も 出来ない。<sup>4)</sup>  
 c. 結局、羽田に 戻ってからしか 何も できない状態。  
 (16) a. \*誰も アスペクトしか 読まなかった。 (Kato(1985))  
 b. 誰も 平均3ページまでしか 見ないのです。  
 c. マニュアルに書かれた 範囲内でしか 誰も 経験しなくなり。

(15)と(16)は同様のNPI「しか」と「何も/誰も」が共起したにも関わらず、(15a)と(16a)は

4) 以下、本稿で提示される(15)-(29)の多重NPI構文はすべて実例である。



非文であるのに対し、(15b,c)と(16b,c)は正文である。(15a)(16a)と(15b,c)と(16b,c)の相違点は「しか」の現れる統語的位置である。というのは、(15a)(16a)の場合、「しか」はそれぞれ主格と対格の項位置に現れるのに対し、(15b,c)と(16b,c)の場合、それぞれ「で」「てから」「まで」に後接し付加詞位置に現れている。「しか」は副助詞の中で名詞句や後置詞などさまざまな要素に後接できるという統語的特徴を用いると、当該の助詞が格助詞かまたは副詞助詞かを区別するのにあたって有用であると考えられる。しかも、多重NPI構文は上述したように「項・付加詞<sup>5)</sup>の非対称性」が見られるため有用なテストとして用いられる。

以下では、「ニ格」が現れた文に「多重NPI」テストをかけてみる。

[伝達先(二重目的語構文)]

- (17) a. 神様は自ら努力したものにしか 何も 与えてくれないそうです。  
 b. 僕は気に入った 人にしか 何も 挙げないけどね。

(17)における「ニ」は二重目的語構文に現れ、伝達先の意味役割を持っている場合である。このとき、「ニ」は「しか」に前接し「何も」と共起しているが、正文である。上述の(14)の日本語の多重NPI構文の認可条件に基づき、(17)における「ニ」は付加詞位置に現れ、副詞格を持っていると考えられる。

[時間]

- (18) a. 緊急時にしか 誰も 来ないような場所。  
 b. そもそも人と感覚がずれているみたいで、気分がのっている 時にしか 何も できません。

(18)における「ニ格」は「時間」を示すものである。(18a)は「-にしか」が「誰も」と、(18b)は「何も」と共起した多重NPI構文であるが両者とも適格文である。このことから「時間」を示す「ニ格」は副詞格に属することが示唆される。

続けて副詞格に属する「ニ格」が用いられた多重NPI構文の例を以下に提示する。

[目的]

- (19) a. テストにしか 誰も 使わなかった。

5) 項はここでいう文法格に、付加詞は副詞格に類似する。

- b. 人間は 自分のためにしか 何も できない。

[存在点]

- (20) a. この山崎ビルって 2Fにしか 誰も 入っていないの。

- b. 本当の意味で 呼ぶ者の目の前にしか 決して 現れない創造の神。

[収斂先]

- (21) しっかりした 計画にしか 誰も 出費しません。

[経験者]

- (22) a. 戦争を味わった ものにしか 誰も 分かりません。

- b. これはそこで 生きている人にしか 決して 味わえない感覚です。

[起点]

- (23) a. 今回は 姉にしか 何も 借りなかった。

- b. その言葉は本当の学問を何十年と積み上げてきた 者達にしか 決して 発することのできない。

[方向]

- (24) a. 左の方にしか 誰も 乗らないようです。

- b. 本当の私を出さない限り、「偽物の私」にしか 誰も 近づけないんだ。

[伝達先]

- (25) a. 謙虚で常識的な 人にしか 誰も 教えたくないものである。

- b. 彼らは好き嫌いが激しくて好きな 記者にしか 何も 話さない。

[動作者]

- (26) a. パワーのある 人にしか 誰も 引き寄せられない。

- b. これは一部の 人にしか 決して 興味をもたれないかなりマニアックなネタなんです。

[到達点]

- (27) 結局技術を持った 人にしか 誰も 付いて行かなくなる。

[状態述語文における「-に分かる、-に理解できる」]

- (28) a. 誰が何と言おうと 自分にしか 決して 分からない領域である。

- b. その距離感は 当事者にしか 決して 理解できない。

(19)は「ニ」が目的、(20)は存在点、(21)は収斂先、(22)は経験者、(23)は起点、(24)は方向、(25)は伝達先、(26)は動作者、(27)は到達点を示した多重NPI構文であるが、すべて正文である。(28)は状態述語文における「-に分かる、-に理解できる」の場

合であるが、このときの「ニ格」も多重NPIが許される。よって、(19)-(28)における「ニ格」は副詞格に属すると考えられる。

また、下記の(29)は「ヲ格」と同じく直接目的語を示す場合であるが、多重NPIが許されることが分かる。

[「ヲ格」と同じく直接目的語を示す場合:-に反対する、-にあこがれる]

- (29) a. (中略)肯定的な開けに終止符を打つような 出来事にしか 決して 反対はしないのである。  
 b. 特定のタイプの 男性にしか 決して あこがれることのない女性です。

2.2節において城田(1993)は(29)のような「ニ格」を文法格として捉えていることを見たが、このことは上記の「多重NPI」テストの結果から修正されるべきであり、副詞格として捉えられるべきであると考えられる。

以上、(17)-(29)のデータに基づき、ほとんどの「ニ格」は副詞格として捉えられるべきであることが明らかになった。しかしながら、下記のように結果の意味役割を持った「ニ格」は上述したのとかなり異なった振る舞いを示す。

[結果:-になる]

- (30) a. \*喫煙は我々の体に 毒にしか 何も ならない。  
 b. \*花子は 教師にしか 決して ならなかった。

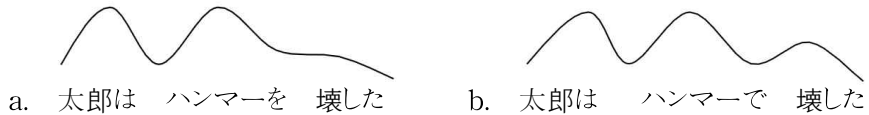
(30)において「結果」を示す「ニ格」は多重NPIが許されない。2.2節において城田(1993)は(30)のような「ニ格」を文法格として捉えていると述べたが、このような城田(1993)の主張は本稿の「多重NPI」テストの結果から支持される。事実、「名詞+になる(結果)」における「ニ格」は文法格として用いられた典型的な場合であると考えられる。

以上、「に+しか」句が他のNPIと共起した「多重NPI」テストを用いると該当の「ニ格」が副詞格か、あるいは文法格かが判断できることを見た。

### 3.2. 補助的テスト：「統語処理原理」

本節では、前節でみた「多重NPI」テストの他にも補助的テストとして「統語処理原

理」が用いられることを見る。Park(2017)はUechi(1993)とShinya(2005)を引用し日本語と英語において項と付加詞におけるピッチ(pitch)に違いが見られると主張する。次の(図1)を見ていただきたい。



(図1) 項と付加詞におけるピッチの違い(Park(2017:241)を一部改変)

(図1a)は「項(-ヲ)+動詞」の連鎖であり、(図1b)は「付加詞(-デ)+動詞」の連鎖である。動詞「壊した」のピッチ変化に注目すると、(図1b)の付加詞のほうが(図1a)より大きいことが分かる。このような現象が生じる理由について、Shinya(2005)は付加詞の前では句の境界線(boundary)が存在するからであると主張する。本稿がShinya(2005)の主張を統語論的観点で再解釈すると、日本語母語話者は格助詞と副詞助詞を話したり、聞いたりするとき、次の図式のような統語処理(syntactic processing)を行うということになる。

(31) a. [DP [NP …]-が] [DP [NP … ]-を]

b. [DP [NP …]-o] | [PP [DP … ]-で]

句の境界線

((同:242)を一部改変)

要するに、副詞助詞の前では格助詞の場合と違い、句の境界線ができ格助詞の場合とは明らかに異なった統語処理を行うということである。このことは「テ格」のみではなく、「ニ格」の場合にも適用できる。よって、本稿が提示した(17)-(29)は副詞助詞として(図1b)のようなピッチ変化を持つと考えられる。しかし、ここで一つ問題点が生じる。というのは、本稿が格助詞として提示した(30)の「名詞+になる(結果)」文が果たして(図1a)のようなピッチ変化を示すかどうかである。このことは統語処理の実験を行わない限り分からない問題で、現時点では今後の課題にするしかない。ただし、今後当該の助詞が格助詞か、副詞助詞かを見分ける際に、上述した統語処理原理<sup>6)</sup>は「多重NPI」テストに加わって、有効であることは否定できない。

6) 統語処理原理に関する更なる内容はPark(2017)を参照してもらいたい。

以上、本節と3.1節の説明により本稿の主張(10)が妥当であることが明らかになった。

## 4. おわりに

本稿では現代日本語における「ニ格」の統語的特徴、特に先行研究において未解決のまま残されてきた課題を新たな統語的テストを用いると解決できることを提案した。従来、「ニ格」が持つさまざまな用法に引かれ「ニ格」の研究は脚光を浴びてきた。統語論研究において「ニ格」の性質、特にどういう用法が文法格か、または副詞格かを判断するのは格付与において非常に重要な問題である。しかしながら、これといった統語的テストが見つかっておらず、先行研究では今後の課題として残されてきたと考えられる。本稿は、(i)日本語の多重NPIは必ず付加詞位置に現れなければならないという強力な統語的制約が存在する点、(ii)NPIの中で「しか」はさまざまな格助詞に後接できるというもう一つの統語的特徴が存在する点に着目し、従来残されてきた研究課題を解決した。すなわち、「に+しか」が同一節内において他のNPIと共起できたらその「ニ格」は副詞格、共起できなかったら文法格として捉えられるのである。その結果、ほとんどの「ニ格」は副詞格に属しているが、「名詞+になる」のように結果を示す「ニ格」は典型的な文法格であることを主張した。本稿で取り扱われなかった「ニ格」の統語的性質の判断において本稿が提案した「多重NPI」テストが有用に用いられると考えられる。加わって、補助的テストとしてピッチの違いを生かした統語処理原理も有効である。

本稿で提案された二つの統語的テストは「ニ格」だけではなく、他の格助詞、例えば「ト格」や「テ格」などにも適用できると考えられる。詳細は別稿に譲りたい。

## 【参考文献】

- 安藤貞雄・小野隆啓(2000)『生成文法用語辞典』、大修館書店。  
 石田尊(2003)『日本語ニ格受動文の統語論的分析』、筑波大学博士(言語学)学位論文。  
 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞-用法と実例-』、秀英出版。  
 城田俊(1993)「文法格と副詞格」新田義雄(編)『日本語の格をめぐる』、くろしお出版、pp.67-94。  
 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』、むぎ書房。  
 菅井三実(2007)「格助詞「に」の統一的分析に向けた認知言語学的アプローチ」『世界の日本語教育』17、pp.113-135。

- 田中春美(1988)『現代言語学辞典』、成美堂.
- 竹沢幸一・John Whitman(1998)『格と語順と統語構造』、研究者出版.
- 朴江訓(2007)「「しか-ない」の多重NPI現象について」『日本語文法』7-2、くろお出版、pp.154-170.
- 朴江訓(2010)「日本語における多重否定極性表現の語順制限について」『日語日文学研究』73、韓国日語日文学会、pp.261-276. (DOI: 10.17003/jllak.2010.73.1.261)
- 朴江訓(2012)「日本語の多重否定一致構文の統語的研究-統語構造と意味役割を中心に-」『日本研究』53、韓国外国語大学校日本研究所、pp.309-328. (DOI: 10.15733/jast.2012.53.309)
- 朴江訓(2014)「いわゆる項と付加部の非対称性について」『日本言語文化』28、韓国言語文化学会、pp.25-44. (DOI: 10.17314/jjlc.2014..28.002)
- 朴江訓(2019)「多重「不定語モ」構文の認可条件-統語処理原理の観点から-」『日本語学研究』60、韓国日本語学会、pp.69-86. (DOI: <http://dx.doi.org/10.14817/jlak.2019.60.69>)
- 副島健作(2003)「現代日本語の後置詞について」『琉球大学欧米文化論集』47、pp.53-72.
- Fillmore C. J.(1968) The case for case. *Universals in Linguistic Theory*, pp.1-88.
- Hagège.C.(2010) *Adpositions*, Oxford University Press.
- Kuryłowicz, J.(1949) Le probleme du classement des cas. *BPTJ*, t. 9.
- Miyagawa, S.(1997) Against optional scrambling. *Linguistic Inquiry* 28, pp.1-26.
- Sadakane, K. & Koizumi, M.(1995) On the nature of the “dative” particle *ni* in Japanese. *Linguistics* 33, pp.5-33.
- Shinya, T.(2005) The Intonational Asymmetry Between Argument and Adjunct in Japanese. *Occasional papers in Linguistics: Papers in Prosody* 30, pp.185-218.
- Uechi, A.(1998) *An Interface Approach to Topic/Focus Structure*, University of British Columbia.
- Park, K. H.(2014) A Contrastive Study of Japanese and Korean Negative Sensitive Items: a Grammaticalization Approach. *Language Sciences*. England: Elsevier Limited. 45, pp.152-172.
- Park, K. H.(2015) A Discrepancy in the Degree of Grammaticalization of Korean and Japanese Negative Sensitive Items: A Corpus-Based Study. *Japanese and Korean Linguistics* 22. Stanford: CSLI Publications, pp.149-164.
- Park, K. H.(2017) Negative concord vs. negative polarity: Focusing on argument-adjunct asymmetry. *Linguistic Research* 34, pp.225-246.

### 【コーパス】

少納言 現代日本語書き言葉均衡コーパス KOTONOHA <http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search>

### 【辞書類】

『現代言語学辞典』、成美堂 [1988年出版]

『日本語国語大辞典(第二版)』、小学館 [2001年出版]

논문 투고 일자 : 2019. 12. 29.
논문 심사 일자 : 2020. 01. 28.
게재 확정 일자 : 2020. 01. 30.

---

 <要旨>
 

---

## 統語論的観点からみた「ニ格」

朴江訓

本稿の目的は現代日本語における「ニ格」の性質を統語論的観点から明らかにすることである。特に先行研究において未解決のまま残されてきた課題を新たな統語的テストを用いると解決できることを提案する。従来、「ニ格」が持つさまざまな用法に引かれ「ニ格」の研究は統語論・意味論・語用論などのアプローチから脚光を浴びてきた。統語論研究において「ニ格」の性質、特にどのような用法が文法格か、または副詞格かを判断するのは格付与において非常に重要な問題である。しかしながら、これといった統語的テストが見つかっておらず、先行研究では今後の課題として残されてきたと考えられる。本稿は、(i) 日本語の多重NPIは必ず付加詞位置に現れなければならないという強力な統語的制約が存在する点、(ii) NPIの中で「しか」はさまざまな格助詞に後接できるというもう一つの統語的特徴が存在する点に着目し、従来残されてきた課題を解決する。すなわち、「に+しか」が同一節内において他のNPIと共起できたらその「ニ格」は副詞格、共起できなかつたら文法格として捉えられるのである。

## Case 'ni' from the viewpoint of Japanese syntax

Park, Kang-Hun

The purpose of this paper is to clarify the nature of Case 'ni' in modern Japanese from a syntactic point of view. In particular, I propose that issues left unresolved in previous studies can be resolved using a new syntactic test. In the previous studies, the study of Case 'ni' has been spotlighted by approaches such as syntactic, semantic, and pragmatic methods, drawing on the various uses of 'ni'. Determining the nature of Case 'ni' in syntactic studies, especially which usage is grammatical or adverbial, is a very important issue in terms of case assignment. However, such a syntactic test has not been done. Therefore, it has been left as a future subject in previous studies. This paper is based on two observations.: (i) There is a strong syntactic constraint that NPIs in multiple NPI constructions in Japanese must always appear in the adjunct position and (ii) NPI 'sika' can be attached to various case particles. In other words, if 'ni + sika' can co-occur with other NPIs in the same clause, then the Case 'ni' is categorized as an adverbial Case, and if it cannot co-occur, it is classified as a grammatical Case.